

元田永孚における開国論への転換

池田 勇太

はじめに

本稿は、肥後細川家の藩士であった元田永孚（1818-1891）¹が開国論を唱えるに至った経緯を検討し、幕末、特に嘉永・安政期（1848-1860）における攘夷論から開国論への思想変化のあり方について考察を加えるものである。

本稿の課題を述べる前に、その前提となる攘夷論と開国論をめぐる問題について、論点を整理しておきたい。攘夷論から開国論への転換について、これまでの研究で重要な主題となってきたのは、いかにして華夷観念から脱し、西洋的な国際秩序観を受容していったかという問題であった²。しかし、19世紀東アジアにおける西洋列強への対抗は、何よりも侵略への防衛として当事者たちに意識されていたものである。華夷観念と国家防衛における強硬論とは結びついてはいたが、価値的次元の論理と戦略的次元の論理は一応区別して考えねばならない。

日本・朝鮮・中国の三か国における攘夷論・守旧論を比較研究した藤田雄二の研究³は、後者の次元⁴において、攘夷論の論理構造を明らかにした仕事といえる。藤田によれば、攘夷論は和親論の不完全さを批判して構築された論理であり、したがって、西洋の軍事的優位に対する認識の深化が攘夷論者たちの和親論への転向に寄与することはなく、和親論者による説得が攘夷論者を転向させるというものでもないという。この議論では、攘夷論と和親論とは交わらない平行線をたどり、攘夷論からの転向はあくまで自らの思考と経験の展開上に起こることになる。ただ、藤田の研究は理論に純化させた向きがあるため、歴史として語り直すためには、時間軸による変化や挟雑物を含む歴史事象の複雑さのなかで、再度検討していく必要があるだろう。

なお、攘夷は和親との対で和戦の問題、開国は鎖国との対で国交・貿易の問題である。それぞれ異なる対立軸でありながら同居し混線しているため、鎖国体制の枠内での和親条約⁵や、開国を展望する破約攘夷論など、現在の視点では一見矛盾とも思える外交態度が幕末には存在する。本稿で論じるのは攘夷から開国への思想変化であり、攘夷から和親への転換ではないことは、ここ

¹ 元田永孚は、一般に明治前期の活躍を通じて知られている。彼は「教育勅語」の起草者の一人として、あるいは明治天皇を教育した儒者として知られ、宮中保守派の代表的人物とされる。しかし幕末維新期には元田は横井小楠の学党の一人であり、維新変革の推進者であった。保守派に位置づけ得るのは文明開化期以後である。本稿では嘉永・安政期における元田の思想を中心に検討を行っていくが、この作業はまた、同時期の横井小楠の学党が帯びていた政治思想についても新たな知見を加えるものとなるだろう。

² 古典的な研究として丸山眞男「近代日本思想史における国家理性の問題」（1949年）、同「開国」（1959年、前掲論文とともに丸山眞男『忠誠と反逆』〈筑摩書房、1998年、初出1992年〉に収録）。近年のものでは、桐原健真『吉田松陰の思想と行動』（東北大学出版会、2009年）が、吉田松陰の思想を検討するなかで世界認識の転換を論じ、奈良勝司『明治維新と世界認識体系』（有志舎、2010年）が、幕府内における昌平繫系官僚の積極開国論を検討し、中華意識からの脱却と対等な外交関係構築の認識を論じている。

³ 藤田雄二『アジアにおける文明の対抗』（御茶の水書房、2001年）。

⁴ 藤田は前掲書について、利害得失の次元についての議論であり、是非曲直の次元については留保すると述べている。前掲藤田『アジアにおける文明の対抗』、53～54頁。

⁵ 羽賀祥二「和親条約期の幕府外交について」（『歴史学研究』482、1980年）。

に断っておきたい。

もとより攘夷論から開国論への転向は個別的な経験であり、一様に論じられるものではないし、また、状況の異なる時期の攘夷論（例えば嘉永期と文久期）を一緒くたに扱うことも、いたずらに議論を混乱させるだけだろう。本稿では嘉永・安政期を中心に、元田永孚と、彼に影響を与えた横井小楠の思想変化を検討する。その点では個別的・限定的な事例研究であるが、第一には、熱烈な攘夷論者であった横井の転向過程を見ることで、攘夷論を变形させつつ開国論に進む過程について考察し、また第二に、元田の攘夷論と開国論を見ることで、道理や国体という価値次元の思考展開が攘夷論から開国論への跳躍をもたらしたことを語り得ると考える。

元田永孚における開国論への転換については、これまで主として横井小楠研究において言及されてきた⁶。ただしそれは横井の開国論について検討する傍証としての扱いであり、正面からの研究ではなかった。また、元田の自伝⁷の記述に依拠してきたため、自伝には書かれていない元田の攘夷論についての検討がなされず、したがって攘夷論から開国論への転換という問題も見据えられてこなかったように思われる。本稿では安政5年（1858）の「灯下問答」⁸という文章を中心に、元田の開国論への転換を検討していく。この史料の検討は、元田に関する基礎的研究を行った沼田哲が、その著書⁹のなかで行う予定であったが、果たせないまま亡くなったため、課題として残されたものでもある。以下、第1章で横井小楠の開国論への転換を確認した後、第2章で元田永孚の攘夷論を、第3章で元田の開国論とその国内改革論を検討する。

第1章 横井小楠における開国論への転換

横井小楠が開国論を説き始める過程については既に多くの研究が存在し、改めて贅言を費やす必要もないはずだが、ここに一章を設けたのは、元田が横井の感化によって開国論を固めたという理由のほかに、先に触れた攘夷論からの転向という問題が存在している。従来、その儒教的理想主義によって海外情報を独自に理解し、開国論に転じたとされる横井だが、藤田雄二の攘夷論研究を踏まえて改めて見直してみると、熱烈な攘夷論者であった横井が、攘夷論の地続きに開国論を形成していった姿が見えてくる。

まず、横井の攘夷論が常に泰平の気習を悩みの種としていたことを確認しておこう。外敵の襲来を危惧する志士にとって、非常時の態勢を忌む泰平の心こそ最大の障碍であった。横井はそれを「宴安」と表現している。以下は嘉永3年（1850）の横井の書翰である。

「近年の模様にては必然不遠及干戈可申、有志の士は寝食を安じ不申候へ共、举世総て宴安に陥入、甚しきは外夷の事を申候へば忌諱に触れ候て、却て発狂の唱を成し候位にて、今日の情勢にても少も覚悟不仕、士気の衰弱、風俗の廢弛、甚痛憤の至に奉存（略）」¹⁰

泰平の持続するなか、士気が衰え風俗が弛み、外寇への警戒を呼号し続ける者を煙たがるような平時の気習を、いかにして非常時に切り替えていくか、それこそが国家の命運に関わる課題であ

⁶ 代表的なものとして、山崎正董『横井小楠 伝記篇』（明治書院、1938年）、松浦玲『横井小楠〈増補版〉』（朝日新聞社、2000年）、源了圓『横井小楠研究』（藤原書店、2013年）など。

⁷ 元田永孚「還暦之記」。執筆時期は明治11年（1878）から22年（1889）まで。元田竹彦・海後宗臣編『元田永孚文書』1（元田文書研究会、1969年）。

⁸ 国立国会図書館憲政資料室所蔵「元田永孚関係文書」（以下「元田文書」）115-3。

⁹ 沼田哲『元田永孚と明治国家』（吉川弘文館、2005年）。

¹⁰ 嘉永3年6月19日付藤田東湖宛横井小楠書翰。山崎正董編『横井小楠 遺稿篇』（明治書院、1938年）、144～145頁。

った。志士たちがそこで編み出した考えの一つが、藤田雄二のいう「死地の論」¹¹である。人は必死の地に置かれれば本気で自らを変えるはずだというこの思考は、泰平の毒に対処しようとする攘夷論の核になった。

留意したいのは、ペリー来航前後における攘夷論が、外敵との和戦に焦点を絞る傾向があったことである。幕末の尊王攘夷論に影響を与えた会沢正志斎の『新論』が、「およそ国家を守り、兵備を修むるには、和戦の策、まづ定めざるべからず」と述べ¹²、またペリー来航に対する徳川斉昭の有名な意見書も「和戦の二字」を決めることが第一の急務であるとした¹³ごとく、和戦をこととする論法は、水戸学系の攘夷論には馴染み深いものだった。和戦を決するとはもちろん、和を排して戦に決するという意味である。まず戦に決して人を死地に置こうとするのである。そのためには、背水の陣を敷かねばならない。横井小楠も嘉永3年に書いた手紙のなかで、次のように激しく和議の説を排している。

「(略) 只今より既に和議の説行れ候は実に南宋衰弱の時勢に少しも替り不申候。後来の成行甚だ以て気遣仕候。夫我神州は百王一代、三千年来天地の間に独立し、世界万国に比類無之事に候へば、譬人民は皆死果、土地は総て尽き果て候ても決して醜虜と和を致し候道理無之候。」¹⁴

横井が和議を否定する根拠にしているのは、周知の水戸学的国体論であるが、これに加えて南宋衰弱のアナロジーを用いていることに注目したい。西洋の東漸を宋王朝衰弱のアナロジーで理解する宋学的排外主義¹⁵は、和議を唱えることが王朝の衰弱につながったという歴史認識をもとに、和を排して戦に決することの重要性を説く論理だった。「死地の論」は、宋学的排外主義の応援を得て、過激な攘夷の言説を生みだしていたといえる。

さて、横井がこのような水戸学的国体論や宋学的攘夷論による和戦の思考から脱却するのは、恐らく二度のペリー来航を契機としている。最初の来航（嘉永6年）は、彼に「夷虜応接大意」¹⁶を書かせた。「夷虜応接大意」は、鎖国を国体とする論を斥け、「天地公共の実理」にしたがって有道の国とは交際し無道の国とは絶つという新機軸を打ち出した論著として知られている。ただし、その主張自体は、人材登用を行い、国内の態度を必戦に固めた上で米露の開国要求を道理を以て拒絶すべきだというものである。またその内容も、山崎正董が述べているように、同年8月に横井の同志である長岡監物が藩に提出した封事¹⁷と近似した論理を用いている¹⁸。これは同じ熊本実学党の横井と長岡が、ペリーとプチャーチンの到来後にその対応策を話し合っていたことを推測させる。

横井も長岡も、ともに選択肢として、①和議、②全面的に拒絶、③暫く和して自強の後攘夷、

¹¹ 前掲藤田『アジアにおける文明の対抗』、109～114頁。

¹² 今井宇三郎ほか校注『日本思想大系53 水戸学』（岩波書店、1973年）、107頁。

¹³ 徳川斉昭「海防愚存」嘉永6年7月10日（東京大学史料編纂所編『明治維新史料選集 上 幕末編』（東京大学出版会、1970年）、10頁。

¹⁴ 嘉永3年5月13日付三寺三作宛横井小楠書翰。前掲『横井小楠 遺稿篇』、135～136頁。

¹⁵ 小島毅によれば、尊王攘夷思想は宋学とともに形成し、幕末日本に強い影響を及ぼした中国思想である。小島毅「宋学の尊王攘夷思想とその日本への影響」（『二松學舎大学 人文論叢』95、2015年）。

¹⁶ 前掲『横井小楠 遺稿篇』、11～14頁。熊本大学附属図書館に寄託されている「横井小楠文書」（横井和子氏所蔵）では「夷虜応接之大意」という題になっている（A181）。作成は前掲山崎『横井小楠 伝記篇』、282～289頁、及び前掲松浦『横井小楠（増補版）』、114～115頁の推定で嘉永6年の8月から11月頃とされる。

¹⁷ 細川家編纂所編『改訂肥後藩国事史料』1（国書刊行会、1973年、初出1932年）、171～176頁。

¹⁸ 前掲山崎『横井小楠 伝記篇』、287～289頁。

の三つを挙げ、①はとるに足らず最下等、②は必敗、③は国を誤る俗論で「金宋の覆轍眼前に有之」¹⁹と、すべて否定した後に、④戦闘必死を決し、内は人材登用を進め改革を行い、外は「天地の大義」²⁰を以て米露を拒絶すべきことを主張している。これは「死地の論」である。つまり、横井は内向きの攘夷論をいまだ保持しているわけだが、米露の開国要求を拒絶するために外向きの論理構築を行った結果、有道・無道論という和戦に収斂しない論理を掲げるに至ったのである。

当時、横井は水戸や越前などと連携し、攘夷拒絶・国内改革の構想を描いて種々の働きかけを行っていた。しかし、翌安政元年（1854）、ペリーの再来航に幕府があっさりとして和親を結んでしまったことで、その運動は頓挫する。それは彼が期待していた徳川斉昭の裏切りとして映じ、その後の横井の水戸学批判を導くことになるが²¹、それは兎も角、いったん和親を通じたものをみだりに戦争にすることはできない。機会が去った以上、「和戦の二つを争しは今日に至りては不見識」²²であり、大義を楯に攘夷拒絶と国内改革をするという策略は、ここでいったんその手を奪われたのである。

ついで横井に大きな変化をもたらしたのは、「夷虜」と見ていた西洋への認識の深化だった。よく知られているように、安政2年（1855）の秋、横井は『海国図志』を読み、また弟子で蘭方医の内藤泰吉と議論を続け、開国論を唱えるようになった。これに関する論点は多岐にわたるが、ここでは三つの特徴に目を向けたい。

第一は、横井が国内改革の課題をより深く認識し、それに注力するようになったことである。西洋観が大きく転換したと見られるこの時期、横井が賦した詩に、次のような言葉がある。

「方今洋夷海を擾して来、各藩の戍兵東西に催す。廟議紛々和と戦と。経国安民いづくにかあらんや。嗚呼民貧しく兵弱ければ、何を以て戦はん。地震海翻天変を示し、天変人事の明らかなること日の如くなるも、上下恬然として安宴にあり。君聞かずや、洋夷各国治術に明らかなりと。励精よく上下の情を通じ、人才を公撰して俊傑挙がる。事あらば衆に詢りて国論平らかなり。薄く税斂を征すれば民貧ならず。厚く錢糧を貯へて勁兵を養ふと。緑眼紅毛は禽獣にちかきも、尚人心ありて盛名を得たり。」²³

右の詩で、横井は西洋諸国が人民統治に優れ、結果として強兵を実現しているとの認識を示している。それは民政を疎かにし、民は貧しく軍事改革も進まず、非常時の感覚にも乏しい（と彼が見る）国内状況と対比して描かれている。西洋において実現されている（と信じた）統治法に、彼は驚愕するとともに脅威を感じたといっべてよい²⁴。上下の情通、人材登用、政治問題の国民への諮詢、薄税、強兵——これらの着眼には横井の抱懐する政治論が反映されていると見るべきだが——こうした統治を実現している西洋諸国に、言い訳程度の軍事改革を行って立ち向かったところで、敗を取るのは必定と横井は考えたのである。

¹⁹ 長岡監物の封事。前掲『改訂肥後藩国事史料』1、173頁。

²⁰ 横井小楠「夷虜応接大意」、14頁。

²¹ 前掲松浦『横井小楠（増補版）』、「四 有道の国・無道の国」。

²² 安政元年9月20日付吉田悌蔵宛横井小楠書翰。前掲『横井小楠 遺稿篇』、216頁。条約を結んだことで和戦の論議が無意味となったことは、吉田松陰の態度に顕著に見られる。前掲藤田『アジアにおける文明の対抗』、101～102頁。

²³ 「田中虎六吾為に四時軒記を作る。七古一篇を賦して謝となす」。前掲『横井小楠 遺稿篇』、879頁、原漢文。この詩の草稿が成ったのは安政2年6～7月頃と推定されている。野口宗親『横井小楠漢詩文全集』（熊本出版文化会館、2011年）、169頁。

²⁴ 安政2年9月17日付立花壱岐宛書翰において、「近比夷人の情実種々及吟味候処、中々以前一ト通り考候とは雲泥の相違にて、実に恐敷事に御座候」と述べているのは、この意味であると思われる。前掲『横井小楠 遺稿篇』、224頁。

実際、その後の横井の開国論は、「経国安民」を主眼に主張されている。万延元年（1860）に開国論を全面展開した「国是三論」²⁵において、横井が「封建にして鎖国」という日本の問題を鋭く突き、西洋各国の統治法を引き合いに出しつつ貿易による富国策をはじめとする国内改革を主張したことはよく知られている。国内改革を突き詰めて考えれば、鎖国の弊害は明らかと思われたのである。それは「利用厚生大に経綸の道を開ひて政教を一新し、富国強兵、偏に外国の侮を禦んと欲す」²⁶という視点に基づくものだった。

第二は、泰平の気習を去って海外に対抗できる自強を達成しようという、攘夷論以来の課題が持続していることである。西洋列強との軍事力の格差は攘夷論者に「死地の論」を叫ばせたが、条約を結んだことで、当面は戦争に直結しないまま自強を進めることになった。ここで横井が見出した道は、海軍を興すことだった²⁷。海軍を興すことで、外国より国を守る受け身の状態から主客を転じることができ、船に乗っては「一船即必死の地」²⁸となるため、士卒は力を合わせ強兵を実現することが可能となる。「交易通商に托して海外の諸国に航し、其情状形勢を觀察し、時としては戦争の実地を踏ば、精神自ら湧発して初て太平の習気を脱し、伝聞の者といへども志気を奮励し鋭勇を興起する」はずである²⁹。「幕府もし維新の令を下し、固有の鋭勇を鼓舞し全国の人心を固結し、其軍制を定め其威令を明かにせば、外国の恐るゝに足らざるのみならず、時あつては海外の諸洲に渡航し我義勇を以て彼が兵争を積かば、数年ならずして外国却て我仁風を仰ぐに到らん」³⁰と横井は未来を語り出している。手詰まりであったかに見えた攘夷論は、海軍という道を見出したことで積極的な開国論となったのである。もちろんここには西洋観の変化がある。特にアメリカが平和を希求し他国を侵略しない国であるという認識の変化は、日本が英露の草刈り場となる前に、アメリカの助力を得て海軍を興し、国防を実現するという自強の筋道を横井に描かせた³¹。

そして第三は、以上のごとく戦略的次元において攘夷論から開国を通じた富国強兵の実現へと思想を発展させながらも、横井はそれより一段高く目をつけて理想を語ったことである。横井の本領はあくまで儒教的理想を語ることだった。前出の「夷虜応接大意」においても、鎖国の国体という通念を否定して、「有道無道を分たず一切拒絶するは天地公共の実理に暗して、遂に信義を万国に失ふに至るもの必然の理也」と説き³²、「国是三論」においても、貿易を「天地間固有の定理」と論じ、西洋各国の政治を「殆三代の治教に符合するに至る」と讃えるなど³³、視点の高さが際立っている。

安政4年5月に福井藩士村田氏寿に語った開国論などは、その典型といえよう。

「道は天地の道也。我国の外国のと云ふ事はない。道の有所は外夷といへ共中国也。無道に成ならば我国支那と云へ共即ち夷也。初より中国と云、夷と云ふ事ではない。国学者流の見識は大にくるいたり。終に支那と我国とは愚な国に成りたり。西洋には大に劣れり。此で墨

²⁵ 前掲『横井小楠 遺稿篇』、29～56頁。

²⁶ 前掲『横井小楠 遺稿篇』、41頁。

²⁷ 前掲横井小楠「国是三論」。なお後の元治元年の「海軍問答書」（前掲『横井小楠 遺稿篇』、19～28頁）にも同様の議論が展開されている。

²⁸ 前掲「国是三論」、48頁。

²⁹ 前掲「国是三論」、49頁。

³⁰ 前掲「国是三論」、46～47頁。

³¹ 前掲「国是三論」、同「海外の形勢を説き併せて国防を論ず」（前掲『横井小楠 遺稿篇』、62～64頁）。

³² 前掲「夷虜応接大意」、11頁。

³³ 前掲「国是三論」、38・40頁。

利堅杯は能々日本の事を熟観致し決して無理非道な事を為さず、只日本を論して漸々に日本を開くの了簡也。猖獗なるものは皆下人共なり。爰で日本に仁義の大道を起さばならず。強国にならばならず。強なれば必ず弱あり。此道を明にして世界の世話やきにならばならず。一発に壺万も貳万も戦死すると云ふ様成事は必止めさせにばならず。そこで我日本は印度に為敷、世界第一等の仁義の国に為る敷、頓と此二筋じや。此外には更に無い。」³⁴

華夷観念を相対化しているのは、西洋各国に対する理解が進んだことを背景としてと思われるが、それを天地の道という観点から説いている。世界の世話焼きとなって戦争を止めることを提起するなど、その理想の高邁さは、戦略的次元における横井の攘夷論からの転向をかすめてしまうほどである。そして恐らくこの高邁さが、元田の開国論の性格を決定したのである。

横井の開国論について論ずべき点はなお多々ある。しかしそれらは諸研究に譲って、次に元田永孚の攘夷論を見ていこう。

第2章 元田永孚の攘夷論

元田は自伝のなかで、開国論を唱えるに至った経緯を次のように語っている。ペリー来航以来、攘夷鎖国の論は天下に満ちて、交易の理を唱える者はいなかった。しかし元田の思うに、天地の道からすれば隣国交通しない理はなく、もしも相手が夷でなければこれを拒絶することは礼を失い、戦争になってもこちらに曲があるため勝敗は明らかである。日本も王朝の盛代においては皇化を三韓から化外の地まで及ぼそうとしていたのであり、当時の国是は開国して道を弘めるものだったはずである。いまこそ復古して国是を隣国交誼の天理に定めるべきである、と。このように密かに開国論を懐いていた元田が、ある日横井の開国論を聞いたところ、それは、天地宇内の道理は国を開くことにあり、外国では夙にそうしているので、我が国も早く開国に一定すれば天下の衰退を興して富国強兵を実現し、万国の上に出るはずだ、というものだった。横井は、まず米国と交親すべきであり、もし自分を用いてもらえれば米国に赴いて大いに協議し、財政の運用や殖産交易の振興をすればいい、ワシントンに「堯舜以来の聖人」と絶賛して、ワシントンは常に世界の戦争を止めることを志としていたから、米国と協議して戦争の害を除くべきである、近來のハリスが説くことにも理がある、と述べたという。元田は自分より格段の高みに進んだ横井の開国論に歓喜し、安政5年、横井が越前藩に招聘されたさい、「灯下問答」を著して横井に贈った。およそこのような筋の話である³⁵。

この自伝の記述にはいくつか問題がある。まず、元田が自分を開国論者として記述し、自らの攘夷論について書いていないことである。自伝の記述は恐らく元田の手許にあった「灯下問答」をもとにしており、それ以前に彼がどのような考えを持っていたのかは、書かれていない。次に、自伝では安政5年に横井が越前に赴くさい「灯下問答」を贈ったことが書かれているが、横井が福井に出立したのは同年の3月であり、仲秋（8月）と記載された「灯下問答」とは時期がずれる³⁶。また、自伝には「先生〔横井〕此卓見安政乙卯の年〔2年〕に在りて天下誰か此見を具したるや」³⁷と書かれているが、横井の話に出てくるハリスは安政3年7月の来日である。元田が横

³⁴ 村田氏寿『関西巡回記』（三秀舎、1940年）、35頁。

³⁵ 前掲「還暦之記」、67～68頁。

³⁶ もっとも、「灯下問答」に書かれた年月に間違いがないともいいきれない。例えば横井の「夷虜応接大意」は内容的に嘉永6年の作でありながら「嘉永七寅年十月下浣横井時存識」と書かれている。「灯下問答」の場合、あるいは横井に贈った後、再稿したものかもしれない。

³⁷ 前掲「還暦之記」、68頁。

井の開国論を聞いたのがいつかはわからないが、安政3年秋から安政5年春の間であることは間違いないだろう。ではそれ以前の元田はどのような対外論を持っていたのか。以下に検討していこう。

嘉永6年11月、細川斉護は長岡監物を浦賀警備地の総帥に起用した³⁸。兵を率いて東上する長岡監物のもとには海岸防備に関する献策が有志者たちから種々届けられた模様であり³⁹、元田永孚もまたその一人だった。元田は12月、久しく疎遠にしていた長岡のもとへ意見書を持参している⁴⁰。その献策⁴¹は、海岸陣地の築営、早船の準備、砲戦への統一、平日の詰め方、士気の維持、預かり地の経営、出動の覚悟、夷人上陸時の警衛、江戸湾口の埋め立て⁴²等、多岐にわたるもので、「海岸を城とし、百年籠城の覚悟」を説き、「客気に乗じ戦を貪」ることを戒めるなど、防御を固めて強大な敵を迎え撃つ態勢を整えることを主眼としたものである。急遽の出馬に対応して即座に長文の意見書を認め得たのは、元田が平素より海防について考えをめぐらしていたためだろう。

もっともここに見るかぎり、必戦を覚悟して海防に向かう長岡への技術的助言という性格のものであり、元田がこの段階でどのような外交論を有していたかは明瞭でない。しかしそれから約1年半後の安政2年8月に著した「灯下問答」⁴³を見ると、やはりそれは攘夷論であったと考えられる。ここで元田は対外戦争を想定した戦い方について論じている。例えば、戦艦との戦いでは相手の驕りに乗ずるべきだと論じる。敵は大艦・巨砲・整然たる軍隊を長所としているから、それに驕って火攻を行い、日本側の狼狽に乗じて上陸するだろう。それに対して急襲を仕掛ければ、「彼等節制に熟し候共列を正すの隙無く、銃戦に長じ候共玉薬を打替るの透間無く、一戦にして彼夷虜を塵にせん事、掌握の中に可有之候」と述べる。また、早舟にて敵船を乗っ取るという戦闘法も書かれている。その実効如何は兎も角、アメリカとの条約締結後も、元田は攘夷戦の方法につき思索していたのである。

なお、この安政2年の「灯下問答」では、江戸城が襲われる場合日光に拠って防戦することが説かれているが、大義においては将軍家より王室を重く見るべきだと主張している。

「惣じて夷狄は王敵にて、則日本全国の讐敵にて有之候得ば、王室のあらん限りは王臣たらん者一人にても生き残り候て討伐の計策を運し、日本のあらん限りは尺土寸地にても持ち堅め候て、皇国を守護致し候社、王土王臣の職分にて、是則皇国王室えの大忠、将軍家えの忠義にて有之候。」

ここには尊王論によって補強された攘夷論が見られる。夷狄は「王敵」であり、王室のある限りは戦いつづけて国を守るのが「王土王臣の職分」で、ひいては将軍家への忠義だという。元田の尊王攘夷論を窺うことができるだろう。

同じ時期、横井は開国論へと転換していくが、元田は横井と疎遠で往来がなく、交流が戻るの

38 前掲『改訂肥後藩国事史料』1、255～257頁。

39 熊本大学附属図書館所蔵「米田家文書」には、それらの献策がいくつか見られる。

40 前掲「還暦之記」、57頁。

41 元田永孚「覚」嘉永6年12月3日、長岡監物宛（熊本大学附属図書館所蔵「米田家文書」134）。

42 富津と観音崎との間を埋め立てて封鎖するという意見が書かれている。非現実的な方策であることを本人も自覚したものか、後に荻昌国に示した草稿からは江戸湾口埋め立ての一条は省かれている。元田永孚「吾妻の驢」（「元田文書」112-2「癸庚存稿」所収）。

43 元田永孚「灯下問答」安政2年8月（前掲「癸庚存稿」所収）。安政5年の「灯下問答」とは別物。

はこの後であったと推測される⁴⁴。西洋観についても、夷狄視が続いており、同年9月には「君父の讐不与共戴天の義」⁴⁵を著し、「洋夷」を不俱戴天の讐敵と論じている。

「今夫洋夷の振舞たるや、其性飽まで陰嶮欺詐にして利慾逞しく、万国を蚕食し五大洲の内一国も其唾にかゝらざる処なき事なり。其術たるや或は戦争を以士民を恐嚇せしめ、或は邪教を以隠投浸漬せしめ、或は交易交和を以利に誘き恩になづけしめ、強国と見ては交易交和を以其利を掠め取、弱国と見ては終に奪ふて是を取る。其術は様々替り有りといへども、其志たるや皆其国を部属になし其帝王を奴隷にせんとの巧なり。今こゝに盜賊あらんに、人に指て云、是汝の家財を奪んとし汝の君父を犯さんとすると。三尺の童子といへども必ず怒て是を撃ん。嗚呼、今洋夷は我尊崇仰仕する所の君上^{〔マツ〕}を以奴隷になし、我祖宗以来の土地を以部属にせんとするものなり。豈眼前此盜賊を以尋常人類と見るに忍んや。是真に今日不与共戴天の大讐敵にて、一日も可忍而交和者にあらざるなり。」

その西洋観が典型的な攘夷論のそれであることは見てのとおりである。ただ、この小文は、世界を蚕食しつづける西洋列強に対する強い敵愾心を語るものだが、横井のような激しさを持たない性格の元田には珍しい文章である。わざわざこのような文を草して西洋に対する敵愾心を自ら鼓舞しようとしたのはなぜであろうか。

翌安政3年に元田が賦した「夜坐歎」⁴⁶という詩のなかに、次のような言葉がある。

「去年刀を磨く燕山の雪。今夜満城糸竹の声。地坼け山崩れるも人悟らず。蛮肴洋酒海風腥さし。然りと雖も皇王の大道いまだ地に墜ちず。扶植せば誰か経世の志なからん。民を愛し士を愛し兼ねて賢に任ずれば、富国強兵立ちどころに致すべし。我が炮前にあり、我が刀後に。連発突入鷲よりも猛し。嗚呼文武節儉は常談のみ。鑄礮操練は兎戯に齊し。廟堂人あれども論を須ひず。幽人もまたまさにわが言を忘るべし。」

ついこの間まで外国との戦争に緊張していた国内が、いまや泰平の気分に戻っていることを歎く詩である⁴⁷。攘夷論が平時に戻りやすい泰平の気分を敵視していたことは既に触れたとおりで、即ち元田は和親条約締結後に弛緩した士気を危惧していたのである。

引用していないが、元田はこの詩の末尾で、横井も同じ思いだろうと結んでいる。開国論に転じた横井が強い対外危機意識を懐く元田と同意見というのは一見不可思議に思えるかもしれないが、第1章で論じたごとく、横井は攘夷論の延長に開国論を展開しており、対外危機意識の持続は両者に共有され得るものだったと考えられる。

横井小楠は和親条約締結後、次第に水戸学より離れていったことが知られているが、元田はその後も長岡監物を通じて水戸学の影響を受けていた模様である⁴⁸。安政2年冬に長岡を通じて元田の詩集が会沢正志斎に贈られ、翌3年8月には、元田は手紙と著作を会沢へ送付している。その書翰のなかで元田は会沢の著述を社中（実学党）で読んでいることを伝えている⁴⁹。10月には元田の編纂した「朱文公奏議選」上下二巻が、長岡を通じて徳川斉昭と会沢へ送られた模様であ

⁴⁴ 離れていた元田と横井の交友が戻るのは、横井が沼山津に移った安政2年夏以後で、元田が自作の漢詩「三十五年吟」を贈ったことをきっかけとしている。前掲「還暦之記」、55～56頁。

⁴⁵ 元田永孚「君父の讐不与共戴天の義」安政2年9月（「元田文書」115-2）。

⁴⁶ 「元田永孚詩稿」安政3年（「元田文書」114-3、原漢文）。

⁴⁷ 燕山の雪とあるのは、恐らく李白の古楽譜「北風行」を踏まえている。「北風行」は国境での戦争を背景に読み込んだ漢詩である。

⁴⁸ 元田と水戸学との関係については、前掲沼田『元田永孚と明治国家』、49～54頁参照。

⁴⁹ 安政3年8月15日付会沢安宛元田永孚書翰（沼田哲・元田竹彦編『元田永孚関係文書』（山川出版社、1985年））、25頁。

る⁵⁰。この本の序文⁵¹のなかで元田は、宋や清が中華であることに驕って危機を招いたことを引き合いに、日本も「神国を以て自ら居らず」外敵に備えるべきだと警告している。それは華夷観念を相対化する一歩ではあるが、夷狄観が克服されているわけではない。4年6月の荻昌国への書翰にも、弘道館出版の『破邪集』が手許に届いたことや、長岡が藤田東湖の『回天詩史』を入手したことなどを述べており⁵²、長岡を通じてもたらされる水戸学系の著書に心を寄せていた様子が見られる。恐らく安政4年の半ば頃まで、元田は水戸学に親近感を持ち対外強硬論を保持していたのではないだろうか。

第3章 元田永孚の開国論

第1節 安政5年の「灯下問答」に見る開国論

自伝の記述にある程度信を置くならば、元田は横井の開国論を聞く以前、既に攘夷論に疑念を抱くようになっていたことになる。しかし、残された史料からは、そこに至った経緯はわからない。したがって、以下では直ちに元田の開国論を考察していくことにする。検討するのは安政5年8月の「灯下問答」である。なお、この作品は横井の開国論を承けて元田が自らの意見を再構築したものであるため、横井の影響が色濃く表れていることにも留意したい。

「灯下問答」は、問答と名付けられてはいるが、問いは初めのみで、ほぼ全編が外政論と内政論からできている。最初の問いは、日本が「外夷」に接する道は、①鎖国攘夷、②開国交易、③暫く開港後武備を整えて打ち払う、④まず打ち払いをして武威を立ててのち開港する、このいずれが是か、というものである。これに対し元田は、いずれも「天地の大道」「皇国の国体」に悖り間違いだとする。

「惣じて天地の心は、内外隔なく、四海万国を包含して万物を覆育す。天地の道は、遠近を限らず、四海万国を周流して万物を財成す。故に凡天地の間に国するものは、即是に則りて四海万国相共に開導協和して、天工を亮け、天地を達す。就中我皇国は、輿地の東脉に居、天日の全光を受け、寒温の中正を得たる故、其地利人気万国に勝れて純正に、其天工を賛け天化を弘むるの任、是亦万国に勝れて重き事自然の理なり。故に皇国は天道の先覚にして、四海万国を教化し、其人民をして皆以其明德を明らかにし、一物も其沢を蒙らざる者なからしむる事、是本来皇国の国体、天地の大道に則りて、亘古来今変易すべからざるものなり。」万国はともに開導協和して天の仕事を助け達成すべきであり、日本は天道の先覚として万国を教化する位置にある国である——これが元田の提出した世界像である。ここで元田は天地という儒教的な世界観のレベルまで一気に視点を高め、その高みから、これまでの開鎖和戦の議論をまず否定させてみせている。

さらにここでは「国体」を設定し、世界の人々の明德を明らかにすることが日本の国体であるという。王道論的な開国論である。ここでの「国体」とは、儒教的理想主義を体現し、対外関係への積極的な働きかけを念頭に、世界の中における日本の目標の壮大さを表現するものといえよう。元田はこの直後で『神皇正統記』や『中庸』を出して自説を補強し、道は万国に敷くべきものであって、一国一洲に局すべきものではないと述べている。

では、これまでの対外強硬論はどう処理されるのだろうか。まず、中国・夷狄という華夷観念につ

⁵⁰ 前掲「還暦之記」、69頁。

⁵¹ 元田永孚「朱文公奏議序」安政3年10月（前掲「癸庚存稿」所収、原漢文）。

⁵² 安政4年6月20日付荻昌国宛元田永孚書翰（前掲『元田永孚関係文書』）、95頁。

いては、次のように論じる。

「天地の眼より見る時は、四海万国共に一例の国にて、中国夷狄と分つべきやうなし。但天道に従ふを中国と称し、天道に悖るを夷狄と称すべきなり。故に古聖人春秋の法には、夏にしても夷狄の道を行へば夷に貶し、夷にしても夏の道を行へば夏に進む。始より自国異国愛憎の私なく、唯有道と無道との二つにて、中国夷狄と分別したる事にて、後世徒に自国のみを尊大にして、異国を卑下せし私称とは各別なる事なり。我国は猶更自他の分別是なかりしに、近世漢土に効ふて自ら尊大になりしなり。故に方今欧亜諸洲のごとき、我国よりも清土よりも皆夷狄と卑しむべけれども、天地の眼より見互せば、すべて隣国にて、其内に道あると道なきとは自ら是あるべきなり。今や欧亜諸洲の政令の達する、品物の遂る、各国道ある事をしらず、旧見に泥みて夷狄と卑しむるより、我より不義無礼を行ふて、彼が侮を招く、是皆天地の道理に悖り、大本の国体を失ふなり。」

これまで元田のなかで清国の自尊に対する批判は、他山の石ではあっても夷狄観を解消させるものではなかった。しかしここに至って西洋各国が「隣国」として見られるようになる。春秋の筆法は華夷の呼称が固定的なものでないことを裏付ける論拠とされ、天地の観点から自他の愛憎は否定されている。ここに述べられている、西洋各国にも政治・物産・道徳において見るべきものがあるという西洋観の転回が、夷狄観解消の前提となったと思われる。

そして元田は有道・無道論を基準として掲げるに至っている。隣国との交際に相手の義・不義を弁せずこちらから不義・無礼を働いて相手の侮りを受けることは「国体」を失う行為だと主張するのである。恐らくここが、元田の開国論の核心になっていよう⁵³。有道・無道論は夷狄観が持続していれば拒絶の論理として作用するが、西洋観が変化することで許容の論理ともなるのである。相手の正邪も弁せずに拒絶し、日本が軽蔑を受けることは、「国体」を天地の道に外れさせる行為である。それは儒者にとって戦争で敗を取るよりも致命的な傷といえる。

鎖国についても、次のように否定される。元田によれば、古代においては、王室は異国と交際し、貢物も受け無礼があれば征伐もしていたが、のちに武家の時代となると政教が衰え、外国に及ばなくなった結果、鎖国の形になったのであり、「鎖国は衰世の勢に成れる国形」だという。また、鎖国して外国と交わらないのは家を鎖して郷隣に交わらないようなものだとも批判している。

したがって攘夷論は、「元来彼我の私見に泥み、宇内の事情に暗く、古今の世変に達せず、畢竟彼を敵視する一時拒抗の気概に出て、天理に根し至大至剛の正気にあらざる故、一旦戦敗る時は忽和議を求め彼より開かるゝに至るべきなり」と否定される。天地の理や世界の事情、日本の歴史などへの無理解を根拠に、一時的な敵愾心は「至大至剛の正気」ではないから、敗れたら外国から開かれる目に遭うというのである。元田はこのように、攘夷論の背景となってきた価値観を転換することで、攘夷論を否定したといえる。

他方で、逆に幕府の開国政策についても、戦争を恐れる心より迫られて開国することは「浸潤の患」となり、外国の凌侮を受けるに至るだろうと見ている。攘夷論にしても開国論にしても、元田は視野の狭い受け身の和戦論から脱却して、天地の観点から四海に道を布くという境地へと踏み込んでいた。そこで次のような言葉が出てくるのである。

「嗚呼堂々たる開闢已来神聖相伝の皇国、斯道を四海万国に布施して、遍く兆民をして其功沢を蒙らしむる事を思はず、却て瑣々たる海濱の一編国を鎖して、天地の化育を私に狭くす

⁵³ のちの文久2~3年の京都政局に処した元田が、攘夷論へ反対する論理もこれによっている。文久2年12月の長岡護美宛元田永孚献言（「元田文書」112-6「出京私記」所収）。

る事、是豈天地祖宗の神靈に叶ふべけんや。況皇国二百余年の太平を一洲に私せんよりは、是を推して海外の戦争をも止めしめ、彼人民をして皇化に浴せしめたらば、盛徳大業豈是を
超る事あらんや。」

これは横井と同じ世界の世話焼き論である。鎖国より一転して、日本の太平をひろめ海外の戦争をも止めさせるというものである。天地を論じ、西洋に道があると述べ、有道・無道論によって華夷観を相対化するなど、横井の影響は随所に見ることができる。

元田は「斯道」を四海万国に布くといっているが、それは世界の戦争を止めるというだけでなく、教えを敷くという意味でもある。「斯道」というのは三種の神器に象徴される明・仁・義の三徳で、日本化された儒教⁵⁴である。元田は天地の間にある人間はすべて同じ天性を享けており、すべての国は同じ天命を享けているという。先覚である日本が明・仁・義の道を以て世界の人々が明德を明らかにできるようにするというのは、王道論的な開国論といえようか。

さて、このような観点から、元田はいまや非常の功業を立てる非常の機会だという。海外各国が来航しているからである。

「故に今我廓然として誠心を開き公道を布き、彼と会同商議し、大に条約を立て五大洲の国是を定め、私の戦争を止て、各国の人民を救ひ、鴉片煙のごとき、凡人の国を害するの類は、悉く是を改めて人の生を全し、米穀金銀凡の国産、并炮艦器械等製造の品物、凡人民に利用あるの類は、益以公平融通し、四海万国年々々に交易通信して、各国の人民各分願を得、方正均斉にして、一毛の私利を営む事なく、一民も膏沢を蒙らざるものなく、絜矩の道五大洲に行互り、干戈腥膻の苦を見る事なくして、普く天地の化に浴したらんには、豈天地間開關未曾有の大経綸にあらずや。」

横井の有名な国際会議論を想起させる文章であるが、より理念的な語りであり、この段階では無勅許条約に起因する破約の問題も含まれていない。各国と条約を立てて世界の国是を定め、私戦を止め、アヘンを禁じ、交易・通信を行って人民に恩沢を蒙らせようという、壮大な夢が描かれる。

元田の開国論の特徴の一つは、価値論の次元で論じていることである。横井の場合、価値論に加え、戦略的次元においても攘夷論の延長に開国論を展開していたが、元田は価値論から戦略的次元の選択肢を批判している。これは、元田の開国論への転換が理想主義に立脚して行われていたことを示している。そしてもう一つの特徴は、儒教的な理想主義と国体論とによって開国を基礎づけたことである。最後にこの国体論を含め、元田の国内改革意見について検討しておこう。

第2節 開国論と国内改革

「灯下問答」ではその最後に、外政についてかくするうへは、内政の一新を必要とするとして、以下のような政策を列挙している。①王室を尊崇して君臣の倫を明らかにする、②諸侯を親睦して上下の人心を一つにする、③参勤交代を緩和して各藩の治教に務める、④人材を公選して列国の士気を通じる、⑤百工の政を修めて国用を饒かにする、⑥交易の利を公にして四民に融通する、⑦軍制改革により冗兵を省く、⑧学校により教学の道を立てる、⑨3年に一度王室に朝し5年ご

⁵⁴ 三種の神器を儒教の三徳の象徴と見る考えは北畠親房『神皇正統記』に由来し、徳川時代の儒者の意見に広く見られる。土田健次郎はこうした思想について、朱子学流にえば日本では「正統」である皇室が「道統」をも請け負ったと評している。土田健次郎「朱子学の正統論・道統論と日本への展開」(吾妻重二・黄俊傑編『国際シンポジウム 東アジア世界と儒教』(東方書店、2005年))、同『儒教入門』(東京大学出版会、2011年)、同『江戸の朱子学』(筑摩書房、2014年)。

とに列国を巡視する。――その詳細は不明だが、このうちいくつかは、後の文久幕政改革で横井小楠が提起した政策と近似している。

文久2年(1861)に横井が幕政改革で示した「国是七条」⁵⁵は、a.将軍が上洛して列世の無礼を謝罪する、b.参勤交代を止めて述職とする、c.諸侯の室家を帰す、d.外藩譜代を限らず賢を選んで登用する、e.大いに言路を開いて天下と公共の政をなす、f.海軍を興す、g.相对交易を止めて官交易とする、というものである。aと①、b・cと③、dと④は通じるものがある。また両者の相違で、横井にあって元田にないe・fのうち、海軍のことを元田が書いていないのは示唆的だろう。横井が戦略的次元において攘夷論の延長に海軍や貿易を通じた富国強兵論を展開したのに対し、元田はその道を通らなかったからである。

重要な点は、横井も元田も、将軍が天皇に対して君臣関係を明確にすることを第一に要求したことである。元田に至っては禁裏への述職と天子の巡狩という、天皇を現実に王として位置づける制度も構想している。これらは彼らが考える「国体」の姿に現実を近づけようとする主張といえるだろう。「灯下問答」において元田は次のように天皇と幕府との関係を述べている。

「我朝中世已降、国勢一変して覇府の治となれり。然れども王室の尊き、皇統綿々、百王不易、与天壤無窮。覇府は則一代の擬主、故に其徳あれば其位を得、其徳なければ其位を失ふ、漢土の授禪、亜墨の共和政治のごとし。但亜墨は君臣の倫明らかならず。漢土は君臣の倫明らかなりといへども、革命の時に至りて、聖人にあらざるよりは其道窮す。我朝は万世一君、列国翊戴し更革ありといへども君臣の倫終に乱れず、五大洲無比の国体と云べし。」

この史料は、元田や横井に対する研究史上の疑念に対する一つの回答となっている。その疑念とは、堯舜を理想とし、ワシントンを絶賛する横井と元田にとって、天皇もまた徳がなければ位を失うという存在だったのではないかというものである⁵⁶。元田の回答は、日本は万世一君により君臣の倫が乱れない比類ない国体であるため、皇統が変わることはない。幕府のような覇府は、徳があれば位を得、徳がなければ位を失う、あたかも中国の禪譲やアメリカの共和政体のようなものだが、皇室は変わることがない、というものである。

元田についていえば、こうした議論は他にも散見される。例えば安政元年の作とされる「君臣之大義」のなかでも、「王室は万世不易の大君、幕府は一代依頼の義主、国君は一身委致の恩君」と書いている⁵⁷。また、明治初年に書いたとみられる「華盛頓賛」⁵⁸では、元田はワシントンに最上級の讃辞を与えているが、念のためそれに言葉を付して、ワシントンを礼賛することは共和政治を礼賛することではないといっている。

「(略)それ所謂天理なるものは、その存する所大中至正にして活動変易その宜しきに適するものにあらずや。故に或いは君主専政となり、或いは君民同治となり、或いは共和政治となり、その体裁おのおの異なるといへども、行ふ所の実如何と顧みるのみ。今我が国体を専主する者は則ち美を華盛頓に帰するを嗇しみ、共和政治に垂涎する者は則ち我が邦を挙げてその体に倣はんと欲す。これ皆庸儒の僻眼、豈よく天理に順ひ人心に応ずとなさんや。その罪を先皇に得ること特に少なからざるのみにあらず、また将に華盛頓の詈罵するところたらんと

55 前掲『横井小楠 遺稿篇』、97～98頁。

56 前掲松浦『横井小楠(増補版)』、松浦玲「幕末明治期天皇像の一面」(同『続日本人にとって天皇とは何であったか』(辺境社、1979年))。

57 元田永孚「君臣之大義」(「元田文書」115-8)。年代推定は前掲沼田哲『元田永孚と明治国家』、52頁。

58 元田永孚「華盛頓賛」(「元田文書」115-5)。

す。」⁵⁹

要するに、国ごとに国体はそれぞれ異なるが、そのなかでいかなる行いをするかが重要だという観点から、元田はワシントンを絶賛しているのもあって、日本をアメリカのように共和制にしようというのは間違いだということである。

同様のことは横井も考えていたと思われる。知られているように、慶応元年、松江藩儒の桃節山に対し、横井の弟子の駒井権之助が横井の説を解説したところでは、アメリカと日本とは国体が異なるため、アメリカの方法がよいといってもそれに倣うというものではない、その才徳如何に関わらず天子は天子である、というような意味のことを述べている⁶⁰。横井が血統論を批判したことは有名だが、それは山崎正董がいうように將軍継嗣問題に対する意見と見るべきであり⁶¹、かつ横井が天皇にも血統論批判の矛先を向けていたなら、元田が横井を慕い続けたはずがない。その横井は文久 2 年、幕府に対し、公武合体して君臣の大義を立てることが「御国体の第一義」だと働きかけ⁶²、既存の幕藩制秩序を大転換させることで、その国体論を現実化しようとした。元田や横井にとって、天皇と幕府との君臣関係を明白にすることが、「国体」を顕現させる第一着だったのである。

では、元田が開国論を唱えるに当たって上述のような国内改革論を述べていることを、どう考えたらよいだろうか。元田は「灯下問答」で内政刷新の案を披露した後、「如此なる時は、人民安綏、国勢振強、内外斉一、祖宗已来堂々たる国体、今日に至り益以正大光明にして、天地位焉、万物育焉（略）」と述べている。さして意味のない修辞のようでもあるが、ここに描かれている姿は、望ましい政治を行うことで安民や富国強兵が実現され、その徳沢は周囲にも等しく及んで天地が定まるという、孟子的な王政のイメージである。それは「国体」の発揚として語られているが、いわば朱子学の理想に立ち帰った政治論である。つまり元田の開国論を支えていた王道論の開国論は、その淵源となる王政が国内で実現されることが前提なのである。外交論は外交で終わらずに、内政の一新を必要とするのであり、その第一着手は王室への君臣の倫を現実化することだったのである。

おわりに

攘夷論は、戦略的次元の論理として見るとき、その論理構造のうちに和親論への不信を組み入れた排外思想だった。元田永孚も横井小楠も、ペリー来航以前は水戸学に近く、外敵との和親が国を衰滅に導く選択肢であると考えた宋学的な攘夷論を持っており、徹底した議論を展開する横井の場合、それは「死地の論」となって過激な攘夷論を唱えるに至った。

横井に転機を与えたのは二度のペリー来航である。米露への対応は和戦の論理とは異なる有道・無道論を横井に構築させるとともに、幕府による和親は和戦の論理の前提を消滅させた。その後、安政 2 年の開国論への転向が起こるが、これは西洋への理解の深化によって、西洋にも道があることを発見するとともに、現在の国内政治では西洋に対抗できないことを痛切に自覚したためと考えられる。横井は交易も含めた国家経綸の実現を第一に考え、また海軍の振興を通じた自強の道を見出すに至るが、それらは攘夷論の延長に展開された開国論だったとあってよい。し

⁵⁹ 元田永孚「贅言」（『元田文書』115-5、原漢文）。

⁶⁰ 桃節山「西遊日記」慶応元年 11 月 13 日条（『日本庶民生活史料集成』20〈三一書房、1972 年〉、683 頁）。

⁶¹ 前掲山崎『横井小楠 伝記篇』、355～356 頁。

⁶² 横井小楠「幕府は朝廷に対し君臣の義を明らかにすべし」文久 2 年（前掲『横井小楠 遺稿篇』、98～99 頁）。

かも横井の特徴は、それらを儒教的な理想主義によって基礎づけ、語ったところにあった。

元田は戦略的次元の攘夷論において横井ほど徹底していたとは思われず、そのためか、和親条約締結後も宋学的攘夷論をひきずり、恐らく安政4年の前半頃までその影響下にあったと推察される。元田の開国論は理想主義の傾向が強く出ているが、それまでの和親に対する否定的思考は、いかに処理されたのだろうか。

恐らく、元田のなかで、和親の危険性よりも攘夷のそれの方が増大したのである。元田の開国論の核心は有道・無道論にあった。西洋観の転回により、必ずしも無道とばかりいえなくなった西洋諸国に対して、その有道・無道を問わずに攘夷拒絶を行うことの方が、より危険だと判断するに至ったものと考えられる。相手の正邪も弁ぜずにこちらより無礼不義を働いて相手の軽蔑を招くことは、天地の大道に悖るのみならず、「国体」をも失うからである。それは価値論かもしれないが、儒者にとっては正義こそが勝利の前提であり、国が天地の道を誤り他国の軽侮を受けることの方が、戦争で敗を取るよりも格段に深刻な事態だったのである。

ただ、戦略的次元で和親論への不信を抱く攘夷論者に、そのような価値次元での説得が有効であったかは疑問である。理に敏い元田は横井の儒教的理想主義に歓喜して開国論を固めたが、同じ熊本実学党の長岡監物も下津休也も、安政期においては開国論に同意できなかったのである⁶³。そして元田の親友の荻昌国に至っては、元田の開国論を聞いて、「開国の論は八十二斤の青龍刀」で、これを振るうことができる者は横井のほかにおらず、元田のごときは開国論を筐底にしまって、決して外に出してはならない、と戒めたという⁶⁴。知られているように横井は、桂小五郎や周布政之助、坂本竜馬といった攘夷論者たちと応対して彼らを説得し得る技量を持っていたが、横井と元田との違いはその能力の差というだけでなく、彼らの開国論が持った性格に大きく表れていたと考えられる。

本稿では嘉永・安政期における攘夷論から開国論への転換を、元田永孚に即して検討したが、横井も元田も、多分に特殊な事例であるといえる。ただし、特殊を排除して歴史は語り得ないし、本稿で明らかにした攘夷論・開国論を構築するさまざまな論理や当該期の状況等については、十分に他の事例とも比較検討が可能であろう。本稿の検討が諸研究に資するところがあれば幸いである。

付記

本研究は [JSPS 科研費 26770223](#) の助成を受けたものです。

⁶³ 前掲「還暦之記」、68頁。当時の交友関係を推察すると、長岡や下津は元田から横井の説を聞いた可能性が高い。

⁶⁴ 前掲「還暦之記」、68～69頁。